

# 英語教育

## ENGLISH CLASSWORK

Vol. 60 No. 2 2008

主幹 佐野 正之

### 巻頭言

#### 英語で何を伝えるのか

立教大学大学院異文化コミュニケーション研究科教授 ● 鳥飼 玖美子

最近の英語教育は目標を見失っているように見える。「国際共通語としての英語はコミュニケーションの道具として必須である」という言説には問答無用の力があるが、〈英語は単なる道具なのか?〉と疑問を抱いたり、〈英語で何をやるのか?〉を考えたりするよりは、とりあえずスキルを磨き成果をあげることに一喜一憂していないだろうか。何を話すかという内容よりは、とにかく喋れるように、という焦りにも似た社会の要請は、早期英語教育へ、目に見える成果へと、学校英語教育を駆り立てる。

しかし、外国語教育に内容は不要なのであろうか。そして外国語学習とは、それほど簡単に短期間で果実を収穫できるものなのであろうか。

昨秋、カンボジアのアンコール・ワットを訪問し、その思いを新たにした。石澤良昭氏(上智大学学長)が長年、アンコール・ワット遺跡修復に尽くしてきたことは周知であるが、その出発点は大学時代のフランス語教師の影響であったことを初めて知った。その恩師は、フランス語を教えることに熱心で、うまく発音ができないと「そうじゃないんだ、こうして音を出すんだ」と学生の頬を自分の手で引っ張って口の開き方を教えたりする一方で、学生たちに「一生をかけるような仕事を見つけなさい」と言い続けた、という。

石澤氏は大学生としてアンコール・ワット修復のフランス・チームに参加するが、後年、フランス方式ではなく、「カンボジア人自身の手による、古代クメールの手法での修復」に取り組み、遺跡保存の人材育成に力を注いだ。

優れた師が優れた人材を育てたわけで、その人材が日本とカンボジア両国で次世代を育成している成果が、世界にとって貴重な遺跡修復という形で実を結んでいる。これからの日本がなすべきことを学んだと同時に、外国語を教える教師のあり方についても考えるところが大きかった。

英語という地球語を若い世代に教える私たち教員は、英語を通して次世代に何を伝えようとするのか。時には立ち止まって考えてみたい。



## 新旧学習指導要領比較対照表

文部科学省より新しい『学習指導要領』が平成20年3月28日に告示されました。現行の『学習指導要領』との変更点は以下の通りです。

変更点には下線を付けてあります。

u003c/divu003e

新しい学習指導要領	現行学習指導要領
<p><b>第1 目標</b> 外国語を通じて、言語や文化に対する理解を深め、積極的にコミュニケーションを図ろうとする態度の育成を図り、<u>聞くこと、話すこと、読むこと、書くこと</u>などのコミュニケーション能力の基礎を養う。</p> <p><b>第2 各言語の目標及び内容等</b> <b>英語</b> <b>1 目標</b> (1) 初歩的な英語を聞いて話し手の意向などを理解できるようにする。 (2) 初歩的な英語を用いて自分の考えなどを話すことができるようにする。 (3) 英語を読むことに慣れ親しみ、初歩的な英語を読んで書き手の意向などを理解できるようにする。 (4) 英語で書くことに慣れ親しみ、初歩的な英語を用いて自分の考えなどを書くことができるようにする。</p> <p><b>2 内容</b> <b>(1) 言語活動</b> 英語を理解し、英語で表現できる実践的な運用能力を養うため、次の言語活動を3学年間を通して行わせる。 <b>ア 聞くこと</b> 主として次の事項について指導する。 (ア) 強勢、イントネーション、区切りなど基本的な英語の音声の特徴をとらえ、正しく聞き取ること。 (イ) 自然な口調で話されたり読まれたりする英語を聞いて、情報を正確に聞き取ること。 (ウ) 質問や依頼などを聞いて適切に応じること。 (エ) 話し手に聞き返すなどして内容を<u>確認しながら</u>理解すること。 (オ) まとまりのある英語を聞いて、<u>概要や要点を適切に</u>聞き取ること。</p>	<p><b>第1 目標</b> 外国語を通じて、言語や文化に対する理解を深め、積極的にコミュニケーションを図ろうとする態度の育成を図り、<u>聞くことや話すことなどの実践的</u>コミュニケーション能力の基礎を養う。</p> <p><b>第2 各言語の目標及び内容等</b> <b>英語</b> <b>1 目標</b> (1) <u>英語を聞くことに慣れ親しみ</u>、初歩的な英語を聞いて話し手の意向などを理解できるようにする。 (2) <u>英語で話すことに慣れ親しみ</u>、初歩的な英語を用いて自分の考えなどを話すことができるようにする。 (3) 英語を読むことに慣れ親しみ、初歩的な英語を読んで書き手の意向などを理解できるようにする。 (4) 英語で書くことに慣れ親しみ、初歩的な英語を用いて自分の考えなどを書くことができるようにする。</p> <p><b>2 内容</b> <b>(1) 言語活動</b> 英語を理解し、英語で表現する能力を養うため、次の言語活動を3学年間を通して行わせる。 <b>ア 聞くこと</b> 主として次の事項について指導する。 (ア) 強勢、イントネーション、区切りなど基本的な英語の音声の特徴をとらえ、正しく聞き取ること。 (イ) 自然な口調で話されたり読まれたりする英語を聞いて、<u>具体的な内容や大切な部分</u>を聞き取ること。 (ウ) 質問や依頼などを聞いて、適切に応じること。 (エ) 話し手に聞き返すなどして内容を<u>正しく</u>理解すること。</p>

2

新しい学習指導要領	現行学習指導要領
<p><b>イ 話すこと</b> 主として次の事項について指導する。 (ア) 強勢、イントネーション、区切りなど基本的な英語の音声の特徴をとらえ、正しく発音すること。 (イ) 自分の考えや気持ち、<u>事実などを聞き手に正しく伝えること</u>。 (ウ) 聞いたり読んだりしたことなどについて、問答したり意見を述べ<u>あったりなど</u>すること。 (エ) つなぎ言葉を用いるなどの<u>いろいろな工夫をして話を続けること</u>。 (オ) <u>与えられたテーマについて簡単なスピーチをすること</u>。</p> <p><b>ウ 読むこと</b> 主として次の事項について指導する。 (ア) 文字や符号を識別し、正しく読むこと。 (イ) 書かれた内容を考えながら黙読したり、その内容が表現されるように音読すること。 (ウ) <u>物語のあらすじや説明文の大切な部分などを正確に読み取ること</u>。 (エ) 伝言や手紙などの<u>文章から書き手の意向を理解し、適切に応じること</u>。 (オ) <u>話の内容や書き手の意見などに対して感想を述べたり賛否やその理由を示したりなど</u>ことができるよう、書かれた内容や考え方などをとらえること。</p> <p><b>エ 書くこと</b> 主として次の事項について指導する。 (ア) 文字や符号を識別し、語と語の区切りなどに注意をして正しく書くこと。 (イ) <u>語と語のつながりなどに注意して正しく文を書くこと</u>。 (ウ) <u>聞いたり読んだりしたことについてメモをとったり、感想、賛否やその理由を書いたりなど</u>すること。 (エ) <u>身近な場面における出来事や体験したことなどについて、自分の考えや気持ちなどを</u>書くこと。 (オ) <u>自分の考えや気持ちなどが読み手に正しく伝わるように、文と文のつながりなどに注意して文章を書くこと</u>。</p>	<p><b>イ 話すこと</b> 主として次の事項について指導する。 (ア) 強勢、イントネーション、区切りなど基本的な英語の音声の特徴に慣れ、正しく発音すること。 (イ) 自分の考えや気持ちなどが<u>聞き手に正しく伝わるように話すこと</u>。 (ウ) 聞いたり読んだりしたことについて、問答したり意見を述べ<u>あったり</u>すること。 (エ) つなぎ言葉を用いるなど<u>いろいろな工夫をして話が長くように話すこと</u>。</p> <p><b>ウ 読むこと</b> 主として次の事項について指導する。 (ア) 文字や符号を識別し、正しく読むこと。 (イ) 書かれた内容を考えながら黙読したり、その内容が表現されるように音読すること。 (ウ) <u>物語や説明文などのあらすじや大切な部分を読み取ること</u>。 (エ) 伝言や手紙などから書き手の意向を理解し、適切に応じること。</p> <p><b>エ 書くこと</b> 主として次の事項について指導する。 (ア) 文字や符号を識別し、語と語の区切りなどに注意をして正しく書くこと。 (イ) <u>聞いたり読んだりしたことについてメモをとったり、感想や意見などを</u>書いたりすること。 (ウ) <u>自分の考えや気持ちなどが読み手に正しく伝わるように書くこと</u>。 (エ) 伝言や手紙などで読み手に自分の意向が正しく伝わるように書くこと。</p>

3

英語教育・2008年第2号

新しい学習指導要領	現行学習指導要領
<p>(2) 言語活動の取扱い</p> <p>ア 3学年を通じ指導に当たっては、次のような点に配慮するものとする。</p> <p>(ア) 実際に言語を使用して互いの考えや気持ちを伝え合うなどの活動を行うとともに、(3)に示す言語材料について理解したり練習したりする活動を行うようにすること。</p> <p>(イ) <u>実際に言語を使用して互いの考えや気持ちを伝え合うなどの活動</u>においては、具体的な場面や状況に合った適切な表現を自ら考えて言語活動ができるようにすること。</p> <p>(ウ) 言語活動を行うに当たり、主として次に示すような言語の使用場面や言語の働きを取り上げるようにすること。</p> <p>[言語の使用場面の例]</p> <p>a 特有の表現がよく使われる場面</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・あいさつ ・自己紹介 ・電話での応答</li> <li>・買い物 ・道案内 ・旅行</li> <li>・食事 など</li> </ul> <p>b 生徒の身近な暮らしにかかわる場面</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・家庭での生活 ・学校での学習や活動</li> <li>・地域の行事 など</li> </ul> <p>[言語の働きの例]</p> <p>a <u>コミュニケーションを円滑にする</u></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・呼び掛ける ・相づちをうつ</li> <li>・聞き直す ・繰り返す など</li> </ul> <p>b 気持ちを伝える</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・礼を言う ・苦情を言う ・褒める</li> <li>・謝る など</li> </ul> <p>c 情報を伝える</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・説明する ・報告する ・発表する</li> <li>・描写する など</li> </ul> <p>d 考えや意図を伝える</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・申し出る ・約束する ・意見を言う</li> <li>・賛成する ・反対する ・承諾する</li> <li>・断る など</li> </ul> <p>e 相手の行動を促す</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・質問する ・依頼する ・招待する など</li> </ul>	<p>(2) 言語活動の取扱い</p> <p>ア 3学年を通じた全体的な配慮事項</p> <p>3学年を通じ指導に当たっては、次のような点に配慮するものとする。</p> <p>(ア) 実際に言語を使用して互いの気持ちや考えを伝え合うなどの<u>コミュニケーションを図る活動</u>を行うとともに、(3)に示す言語材料について理解したり練習したりする活動を行うようにすること。</p> <p>(イ) <u>コミュニケーションを図る活動</u>においては、具体的な場面や状況に合った適切な表現を自ら考えて言語活動ができるようにすること。</p> <p>(ウ) 言語活動を行うに当たり、主として次に示すような言語の使用場面や言語の働きを取り上げるようにすること。</p> <p>[言語の使用場面の例]</p> <p>a 特有の表現がよく使われる場面</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・あいさつ ・自己紹介 ・電話での応答</li> <li>・買い物 ・道案内 ・旅行</li> <li>・食事 など</li> </ul> <p>b 生徒の身近な暮らしにかかわる場面</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・家庭での生活 ・学校での学習や活動</li> <li>・地域の行事 など</li> </ul> <p>[言語の働きの例]</p> <p>a <u>考えを深めたり情報を伝えたりするもの</u></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・意見を言う ・説明する ・報告する</li> <li>・発表する ・描写する など</li> </ul> <p>b <u>相手の行動を促したり自分の意志を示したりするもの</u></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・質問する ・依頼する ・招待する</li> <li>・申し出る ・確認する ・約束する</li> <li>・賛成する／反対する ・承諾する／断る など</li> </ul> <p>c 気持ちを伝えるもの</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・礼を言う ・苦情を言う ・ほめる</li> <li>・謝る など</li> </ul>

新しい学習指導要領	現行学習指導要領
<p>イ 生徒の学習段階を考慮して各学年の指導に当たっては、次のような点に配慮するものとする。</p> <p>(ア) 第1学年における言語活動</p> <p>小学校における外国語活動を通じて音声面を中心としたコミュニケーションに対する積極的な態度などの一定の素地が育成されることを踏まえ、身近な言語の使用場面や言語の働きに配慮した言語活動を行わせること。その際、自分の気持ちや身の回りの出来事などの中から簡単な表現を用いてコミュニケーションを図れるような話題を取り上げること。</p> <p>(イ) 第2学年における言語活動</p> <p>第1学年の学習を基礎として、言語の使用場面や言語の働きを更に広げた言語活動を行わせること。その際、第1学年における学習内容を繰り返して指導し定着を図るとともに、事実関係を伝えたり、物事について判断したりした内容などの中からコミュニケーションを図れるような話題を取り上げること。</p> <p>(ウ) 第3学年における言語活動</p> <p>第2学年までの学習を基礎として、言語の使用場面や言語の働きを一層広げた言語活動を行わせること。その際、第1学年及び第2学年における学習内容を繰り返して指導し定着を図るとともに、様々な考えや意見などの中からコミュニケーションが図れるような話題を取り上げること。</p> <p>(3) 言語材料</p> <p>(1)の言語活動は、以下に示す言語材料のうちから、1の目標を達成するのにふさわしいものを適宜用いて行わせる。</p> <p>ア 音声</p> <p>(ア) 現代の標準的な発音</p> <p>(イ) 語と語の連結による音変化</p> <p>(ウ) 語、句、文における基本的な強勢</p> <p>(エ) 文における基本的なイントネーション</p> <p>(オ) 文における基本的な区切り</p> <p>イ 文字及び符号</p> <p>(ア) アルファベットの活字体の大文字及び小文字</p> <p>(イ) 終止符、疑問符、コンマ、引用符、感嘆符など基本的な符号</p>	<p>イ 学習段階を考慮した指導上の配慮事項</p> <p>生徒の学習段階を考慮して各学年の指導に当たっては、次のような点に配慮するものとする。</p> <p>(ア) 第1学年における言語活動</p> <p>英語を初めて学習することに配慮し、コミュニケーションに対する積極的な態度の育成を重視するとともに、身近な言語の使用場面や言語の働きに配慮した言語活動を行わせること。その際、自分の気持ちや身の回りのできごとなどの中から簡単な表現を用いてコミュニケーションを図れるような話題を取り上げること。</p> <p>(イ) 第2学年における言語活動</p> <p>第1学年の学習を基礎として、言語の使用場面や言語の働きを更に広げた言語活動を行わせること。その際、第1学年に加え、特に、事実関係を伝えたり、物事について判断したりした内容などの中からコミュニケーションを図れるような話題を取り上げること。</p> <p>(ウ) 第3学年における言語活動</p> <p>第2学年の学習を基礎として、言語の使用場面や言語の働きを一層広げた言語活動を行わせること。その際、第2学年に加え、特に、様々な考えや意見などの中からコミュニケーションが図れるような話題を取り上げること。</p> <p>(3) 言語材料</p> <p>(1)の言語活動は、以下に示す言語材料のうちから、1の目標を達成するのにふさわしいものを適宜用いて行わせる。</p> <p>ア 音声</p> <p>(ア) 現代の標準的な発音</p> <p>(イ) 語と語の連結による音変化</p> <p>(ウ) 語、句、文における基本的な強勢</p> <p>(エ) 文における基本的なイントネーション</p> <p>(オ) 文における基本的な区切り</p> <p>イ 文字及び符号</p> <p>(ア) アルファベットの活字体の大文字及び小文字</p> <p>(イ) 終止符、疑問符、コンマ、引用符、感嘆符などの基本的な符号</p>

新しい学習指導要領	現行学習指導要領																														
ウ 語, 連語及び慣用表現 (ア) <u>1200語程度の語。</u>  (イ) <u>in front of, a lot of, get up, look forなどの連語</u> (ウ) <u>excuse me, I see, I'm sorry, thank you, you're welcome, for exampleなどの慣用表現</u>	ウ 語, 連語及び慣用表現 (ア) <u>別表1に示す語を含めて, 900語程度までの語(季節, 月, 曜日, 時間, 天気, 数(序数を含む), 家族などの日常生活にかかわる基本的な語を含む)</u> (イ) <u>連語のうち基本的なもの</u> (ウ) <u>慣用表現のうち, excuse me, I see, I'm sorry, thank you, you're welcome, for exampleなど基本的なもの</u>																														
エ 文法事項 (ア) 文 a 単文, 重文及び複文 b 肯定及び否定の平叙文 c 肯定及び否定の命令文 d 疑問文のうち, 動詞で始まるもの, <u>助動詞(can, do, may, など)で始まるもの, orを含むもの及び疑問詞(how, what, when, where, which, who, whose, why)で始まるもの</u> (イ) <u>文構造</u> a [主語+動詞] b [主語+動詞+補語]のうち, (a) 主語+be動詞+ <table border="0" style="display: inline-table; vertical-align: middle;"><tr><td style="border-left: 1px solid black; padding-left: 5px;">名詞</td></tr><tr><td style="border-left: 1px solid black; padding-left: 5px;">代名詞</td></tr><tr><td style="border-left: 1px solid black; padding-left: 5px;">形容詞</td></tr></table> (b) 主語+be動詞以外の動詞+ <table border="0" style="display: inline-table; vertical-align: middle;"><tr><td style="border-left: 1px solid black; padding-left: 5px;">名詞</td></tr><tr><td style="border-left: 1px solid black; padding-left: 5px;">形容詞</td></tr></table> c [主語+動詞+目的語]のうち, (a) 主語+動詞+ <table border="0" style="display: inline-table; vertical-align: middle;"><tr><td style="border-left: 1px solid black; padding-left: 5px;">名詞</td></tr><tr><td style="border-left: 1px solid black; padding-left: 5px;">代名詞</td></tr><tr><td style="border-left: 1px solid black; padding-left: 5px;">動名詞</td></tr><tr><td style="border-left: 1px solid black; padding-left: 5px;">to不定詞</td></tr><tr><td style="border-left: 1px solid black; padding-left: 5px;">how(など)to不定詞</td></tr><tr><td style="border-left: 1px solid black; padding-left: 5px;">thatで始まる節</td></tr></table> (b) 主語+動詞+whatなどで始まる節 d [主語+動詞+間接目的語+直接目的語]のうち, (a) 主語+動詞+間接目的語+ <table border="0" style="display: inline-table; vertical-align: middle;"><tr><td style="border-left: 1px solid black; padding-left: 5px;">名詞</td></tr><tr><td style="border-left: 1px solid black; padding-left: 5px;">代名詞</td></tr></table> (b) 主語+動詞+間接目的語+how(など)to不定詞 e [主語+動詞+目的語+補語]のうち, (a) 主語+動詞+目的語+ <table border="0" style="display: inline-table; vertical-align: middle;"><tr><td style="border-left: 1px solid black; padding-left: 5px;">名詞</td></tr><tr><td style="border-left: 1px solid black; padding-left: 5px;">形容詞</td></tr></table>	名詞	代名詞	形容詞	名詞	形容詞	名詞	代名詞	動名詞	to不定詞	how(など)to不定詞	thatで始まる節	名詞	代名詞	名詞	形容詞	エ 文法事項 (ア) 文 a 単文, 重文及び複文 b 肯定及び否定の平叙文 c 肯定及び否定の命令文 d 疑問文のうち, 動詞で始まるもの, can, do, may, などの助動詞で始まるもの, orを含むもの及びhow, what, when, where, which, who, whose, whyの疑問詞で始まるもの (イ) <u>文型</u> a [主語+動詞]の文型 b [主語+動詞+補語]の文型のうち, (a) 主語+be動詞+ <table border="0" style="display: inline-table; vertical-align: middle;"><tr><td style="border-left: 1px solid black; padding-left: 5px;">名詞</td></tr><tr><td style="border-left: 1px solid black; padding-left: 5px;">代名詞</td></tr><tr><td style="border-left: 1px solid black; padding-left: 5px;">形容詞</td></tr></table> (b) 主語+be動詞以外の動詞+ <table border="0" style="display: inline-table; vertical-align: middle;"><tr><td style="border-left: 1px solid black; padding-left: 5px;">名詞</td></tr><tr><td style="border-left: 1px solid black; padding-left: 5px;">形容詞</td></tr></table> c [主語+動詞+目的語]の文型のうち, (a) 主語+動詞+ <table border="0" style="display: inline-table; vertical-align: middle;"><tr><td style="border-left: 1px solid black; padding-left: 5px;">名詞</td></tr><tr><td style="border-left: 1px solid black; padding-left: 5px;">代名詞</td></tr><tr><td style="border-left: 1px solid black; padding-left: 5px;">動名詞</td></tr><tr><td style="border-left: 1px solid black; padding-left: 5px;">to不定詞</td></tr><tr><td style="border-left: 1px solid black; padding-left: 5px;">how(など)to不定詞</td></tr><tr><td style="border-left: 1px solid black; padding-left: 5px;">thatで始まる節</td></tr></table> (b) 主語+動詞+whatなどで始まる節 d [主語+動詞+間接目的語+直接目的語]の文型のうち, (a) 主語+動詞+間接目的語+ <table border="0" style="display: inline-table; vertical-align: middle;"><tr><td style="border-left: 1px solid black; padding-left: 5px;">名詞</td></tr><tr><td style="border-left: 1px solid black; padding-left: 5px;">代名詞</td></tr></table> (b) 主語+動詞+間接目的語+how(など)to不定詞 e [主語+動詞+目的語+補語]の文型のうち, (a) 主語+動詞+目的語+ <table border="0" style="display: inline-table; vertical-align: middle;"><tr><td style="border-left: 1px solid black; padding-left: 5px;">名詞</td></tr><tr><td style="border-left: 1px solid black; padding-left: 5px;">形容詞</td></tr></table>	名詞	代名詞	形容詞	名詞	形容詞	名詞	代名詞	動名詞	to不定詞	how(など)to不定詞	thatで始まる節	名詞	代名詞	名詞	形容詞
名詞																															
代名詞																															
形容詞																															
名詞																															
形容詞																															
名詞																															
代名詞																															
動名詞																															
to不定詞																															
how(など)to不定詞																															
thatで始まる節																															
名詞																															
代名詞																															
名詞																															
形容詞																															
名詞																															
代名詞																															
形容詞																															
名詞																															
形容詞																															
名詞																															
代名詞																															
動名詞																															
to不定詞																															
how(など)to不定詞																															
thatで始まる節																															
名詞																															
代名詞																															
名詞																															
形容詞																															

新しい学習指導要領	現行学習指導要領
f その他 (a) There + be動詞+～ (b) It + be動詞+～(+for～)+to不定詞 (c) 主語+tell, wantなど+目的語+to不定詞 (ウ) 代名詞 a 人称, 指示, 疑問, 数量を表すもの b 関係代名詞のうち, 主格のthat, which, who及び目的格のthat, whichの制限的用法 (エ) 動詞の時制など 現在形, 過去形, 現在進行形, 過去進行形, 現在完了形及び助動詞などを用いた未来表現 (オ) 形容詞及び副詞の比較変化 (カ) to不定詞 (キ) 動名詞 (ク) 現在分詞及び過去分詞の形容詞としての用法 (ケ) 受け身  (4) <u>言語材料の取扱い</u> ア <u>発音と綴(つづ)りとを関連付けて指導すること。</u> イ <u>文法については, コミュニケーションを支えるものであることを踏まえ, 言語活動と効果的に関連付けて指導すること。</u> ウ (3)のエの文法事項の取扱いについては, 用語や用法の区別などの指導が中心とならないよう配慮し, 実際に活用できるように指導すること。また, 語順や修飾関係などにおける日本語との違いに留意して指導すること。 エ 英語の特質を理解させるために, 関連のある文法事項はまとまりをもって整理するなど, 効果的な指導ができるよう工夫すること。  3 <u>指導計画の作成と内容の取扱い</u> (1) 指導計画の作成に当たっては, 次の事項に配慮するものとする。 ア 各学校においては, <u>生徒や地域の実態</u> に応じて, 学年ごとの目標を適切に定め, 3年間を通して英語の目標の実現を図るようにすること。	f その他の文型のうち, (a) There + be動詞+～ (b) It + be動詞+～(+for～)+to不定詞 (c) 主語+tell, wantなど+目的語+to不定詞 (ウ) 代名詞 a 人称, 指示, 疑問, 数量を表すもの b 関係代名詞のうち, 主格のthat, which, who及び目的格のthat, whichの制限的用法 <u>基本的なもの</u> (エ) 動詞の時制など 現在形, 過去形, 現在進行形, 過去進行形, 現在完了形及び助動詞などを用いた未来表現 (オ) 形容詞及び副詞の比較変化 (カ) to不定詞のうち <u>基本的なもの</u> (キ) <u>動名詞のうち基本的なもの</u> (ク) 現在分詞及び過去分詞の形容詞としての用法 (ケ) <u>受け身のうち現在形及び過去形</u>  (4) <u>言語材料の取扱い</u> ア (3)の「エ 文法事項」の(イ)のcの(b), dの(b)及び(ウ)のbについては, <u>理解の段階にとどめること。</u> イ (3)の「エ 文法事項」の取扱いについては, 用語や用法の区別などの指導が中心とならないよう配慮し, 実際に活用する指導を重視するようにすること。  3 <u>指導計画の作成と内容の取扱い</u> (1) 指導計画の作成に当たっては, 次の事項に配慮するものとする。 ア 各学校においては, <u>生徒の実態や地域の実情</u> に応じて, 学年ごとの目標を適切に定め, 3年間を通して英語の目標の実現を図るようにすること。 イ 各学年とも, 2の「(1)言語活動」のうち, <u>特に聞くこと及び話すことの言語活動に重点をおいて指導すること。</u>

新しい学習指導要領	現行学習指導要領
<p>イ 2の(3)の言語材料については、学習段階に応じて平易なものから難しいものへと段階的に指導すること。</p> <p>ウ 音声指導に当たっては、日本語との違いに留意しながら、発音練習などを通して2の(3)の<u>ア</u>に示された言語材料を継続して指導すること。 また、音声指導の補助として、必要に応じて発音表記を用いて指導することもできること。</p> <p>エ 文字指導に当たっては、生徒の学習負担に配慮し筆記体を指導することもできること。</p> <p>オ 語、連語及び慣用表現については、運用度の高いものを用い、活用することを通して定着を図るようにすること。</p> <p>カ 辞書の使い方に慣れ、活用できるようにすること。</p> <p>キ 生徒の実態や教材の内容に応じて、コンピュータや情報通信ネットワーク、教育機器などを有効活用したり、ネイティブ・スピーカーなどの協力を得たりなどすること。 また、ペアワーク、グループワークなどの学習形態を適宜工夫すること。</p> <p>(2) 教材は、聞くこと、話すこと、読むこと、書くことなどのコミュニケーション能力を総合的に育成するため、実際の言語の使用場面や言語の働きに十分配慮したものを取り上げるものとする。その際、英語を使用している人々を中心とする世界の人々及び日本人の日常生活、風俗習慣、物語、地理、歴史、伝統文化や自然科学などに関するものの中から、生徒の発達の段階及び興味・関心に即して適切な題材を変化をもたせて取り上げるものとし、次の観点に配慮する必要がある。</p> <p>ア 多様なものの見方や考え方を理解し、公正な判断力を養い豊かな心情を育てるのに役立つこと。</p> <p>イ 外国や我が国の生活や文化についての理解を深めるとともに、言語や文化に対する関心を高め、これらを尊重する態度を育てるのに役立つこと。</p> <p>ウ 広い視野から国際理解を深め、国際社会に生きる日本人としての自覚を高めるとともに、国際協調の精神を養うのに役立つこと。</p>	<p>ウ 2の「(3)言語材料」については、学習段階に応じて平易なものから難しいものへと段階的に指導するとともに、理解の段階にとどめたり表現の段階まで高めたりするなどして効果的に指導すること。</p> <p>エ 音声指導に当たっては、聞くこと及び話すことを重視する観点から発音練習などを通して2の(3)の「<u>ア 音声</u>」に示された言語材料を継続して指導すること。 また、音声指導の補助として、必要に応じて発音表記を用いて指導することもできること。</p> <p>オ 文字指導に当たっては、生徒の学習負担に配慮し筆記体を指導することもできること。</p> <p>カ 語、連語及び慣用表現の指導に当たっては、運用度の高いものを厳選し、習熟を図るようにすること。</p> <p>キ 辞書の初歩的な使い方に慣れ、必要に応じて活用できるようにすること。</p> <p>ク 生徒の実態や教材の内容に応じて、コンピュータや情報通信ネットワーク、教育機器などの有効活用やネイティブ・スピーカーなどの協力を得ることなどに留意すること。 また、学習形態などを工夫し、ペアワーク、グループワークなどを適宜取り入れること。</p> <p>(2) 教材は、英語での実践的コミュニケーション能力を育成するため、実際の言語の使用場面や言語の働きに十分配慮したものを取り上げるものとする。その際、英語を使用している人々を中心とする世界の人々及び日本人の日常生活、風俗習慣、物語、地理、歴史などに関するものの中から、生徒の心身の発達段階及び興味・関心に即して適切な題材を変化をもたせて取り上げるものとし、次の観点に配慮する必要がある。</p> <p>ア 多様なものの見方や考え方を理解し、公正な判断力を養い豊かな心情を育てるのに役立つこと。</p> <p>イ 世界や我が国の生活や文化について理解を深めるとともに、言語や文化に対する関心を高め、これらを尊重する態度を育てるのに役立つこと。</p> <p>ウ 広い視野から国際理解を深め、国際社会に生きる日本人としての自覚を高めるとともに、国際協調の精神を養うのに役立つこと。</p>

新しい学習指導要領	現行学習指導要領
<p>(削除)</p> <p>その他の外国語 その他の外国語については、英語の目標及び内容等に準じて行うものとする。</p> <p>第3 指導計画の作成と内容の取扱い 1 小学校における外国語活動との関連に留意して、指導計画を適切に作成するものとする。 2 外国語科においては、英語を履修させることを原則とする。 3 第1章総則の第1の2及び第3章道徳の第1に示す道徳教育の目標に基づき、道徳の時間などとの関連を考慮しながら、第3章道徳の第2に示す内容について、外国語科の特質に応じて適切な指導をすること。</p>	<p>別表1 a, about, across, after, all, am, among, an, and, another, anyone, anything, are, as, at, because, before, between, both, but, by, can, could, do, down, during, each, either, everyone, everything, for, from, has, have, he, her, hers, him, his, how, I, if, in, into, is, it, may, me, mine, must, my, near, nothing, of, off, on, one, or, other, our, ours, over, shall, she, should, since, so, someone, something, than, that, the, their, them, then, these, they, this, those, through, to, under, until (till), up, us, we, what, when, where, which, who, whose, why, will, with, without, would, you, your, yours</p> <p>その他の外国語 その他の外国語については、英語の目標及び内容等に準じて行うものとする。</p> <p>第3 指導計画の作成と内容の取扱い 1 必修教科としての「外国語」においては、英語を履修させることを原則とする。 2 選択教科としての「外国語」においては、生徒の特性等に応じ多様な学習活動が展開できるよう、第2の内容その他の内容で各学校が定めるものについて、課題学習、コミュニケーション能力の基礎を培う補充的な学習、発展的な学習などの学習活動を各学校において適切に工夫して取り扱うものとする。</p>

## 外国語としての 英語学習における「生産力」作り

群馬大学教授 上原 景子



### 1. 教科書と実践的コミュニケーション能力の基礎

生徒たちにとって、教科書はその教科の象徴である。教科書の内容がわかることは、その教科の学習の使命であり、自信と次へのやる気に大きく関わる。つまり、教科の学習は「教科書を勉強する」にほぼ等しい。しかし、教師の立場はそのままの置き換えで「教科書を教える」とはならない。ちなみに英語教師の場合は、「教科書を…」の続きは「教科書を使って英語を〜」、あるいは格助詞を改めて「教科書で英語を〜」となる。それは、平面に印刷された内容を使いながら立体的な言語活動を通して「実践的コミュニケーション能力の基礎」を養うことが目標であるからである。強いて言えば、「教科書を使って英語を〜」の後には、「実践的に使って意思疎通ができる基礎作りの支援をする」となる。平面に印刷されてはいるが、教科書の内容は言語活動を立体的に行うための足場である。足場が不安定であれば、それを使って作業をすることは極めて難しい。したがって、教科書の内容を定着させることは、ことの始まりである。

もう少し踏み込んで考えてみよう。「実践的コミュニケーション能力の基礎」という表現は、一見わかりやすくうなずけるものであるようだが、具体的に1つずつ考えるとなかなか難しい。まず「実践的」とは何か。次に「コミュニケーション能力」とは何か。そして「基礎」というのは何か。外国語で考える前に、母語である日本語で考えてみよう。我々は日本語を生活全体で絶えず使っている。生まれてから、机に向かって教科書で学習したわけではなく、自然にわかるようになり、普通の生活を送るのには文の作り方・単語の使い方・発音・文字などを心配する必要はない。人によっては、ものを書くことの得意・不得意、漢字や語彙の多い・少ない、話し上手・話し下手もあるが、一応、生活や仕事には差支えがない。つまり、「実践的」というのは、身の回りで実際に使え

ることである。

しかし、「基礎」という言葉の要らない母語でも、「誰に話すか／書くか」という場面や状況、「まとまりのあること」「つじつまの合うこと」という首尾一貫性、「わかってもらえるように話す」「明確に書く」などには、注意を払う。文の作り方・単語の使い方・発音・文字などは心配無用でも、「あの人は口の利き方を知らない」「同じ話を難しくする」などと、よく聞く。つまり、「コミュニケーション能力」は、「文の作り方・単語の使い方・発音・文字に不自由がないだけでなく、場面や状況に応じられ、一貫性があり、互いの理解を保障するように言葉を使える力」と言い換えられる。

一方、英語は外国語と言うだけあって、生徒は英語の授業を終えて一歩教室を出ると日本語だけの世界となり、よほどの手段を使わない限り、普段の生活に英語はほとんどない。したがって、机に向かい教科書や教材を使い「意識的に学習」する。自然に触れられないため、文の作り方・単語の使い方・発音・文字の1つひとつに、教室内で出会い「しっかりと」仲よくなることが必要になる。出会い方も、自然な日常の場面で溢れている母語とは違い、不自然な出会い方はどうしても免れない。そこで、「新しい文を使うと何がどのように表現でき、わかるか」という、文とその機能を的確にとらえた出会い方のための場面が必要になる。つまり、英語教師は、たとえ母語とは比べものにならなくても、生徒たちが英語を意思疎通の道具として使えるようになるために、「文の作り方・単語の使い方・発音・文字に大きな不自由がないだけでなく、場面や状況に応じられ、一貫性があり、互いの理解を保障するように使える力」を育てなければならない。このために、教科書を使って、「言語材料について理解したり練習したりする活動」と「コミュニケーションを図る活動」を組み立てることが、主な任務となる。

### 2. 外国語としての英語学習を支える「生産力」作り

生徒が英語の学習に対してやる気を出すには、いくつかのきっかけがある。その中には、「自分の英語が通じた」「相手の話す英語がわかった」「英語のおもしろい話が読めた」などの感動のシーンが含まれる。この背景には、「思ったことが何とか言える／書ける力」や「相手の話が何とか聞ける／読める力」が必要である。私はこうした力を「生産力」と呼んでいる。「外国語の生産力」を育てるためには、「言語材料(文の作り方・単語の使い方・発音・文字)とのよい出会いと仲よくなる作業」「(不自然な中にも極力)自然に近い身近な場面の設定」が不可欠である。これらを「文の作り方」を例にして考えてみよう。

新しく学ぶ英文とのよい出会い方は、その文が身近な場面の中でどのように機能するかが明確にわかる出会い方である。新しい文を学ぶ目的は、それをコミュニケーションの道具として使うことであるから、教師自身が文の機能を理解し、よい出会いの場面を設定し、生徒たちとシェアすることが大切である。ここでのシェアは、練習を通してその文と「仲よくなる作業」の意味と、その先にある「コミュニケーションを図る活動」への道筋をもシェアすることになる。

また、新しい文と仲よくなる作業では、生徒たちが文中の各部分を分析しながら、「くり返し見て、聞いて、言って、書く、十分な練習」が必要である。これは、昔一世を風靡したオウム的な意味のないパターン・プラクティスではない。生産力を育てるには、日本語との対比的分析を巻き込んだ理解と反復や入れ替えの練習は不可欠であるが、その意図は生徒が自分の意思に沿って使えることを目指す「意味のある練習」である。1つひとつの文の作り方がわかり、練習し、簡単なことでも自分の意思で表現できるようにすることが「生産力の細胞」となる。特に、日本語で考えたことを英語で言い、書き、確かめる「確認作業」が十分に行われるべきである。また、日本語との対比の必要性は、以下の理由による。言語学的に見ると、日本語と英語は正対称と言われるほど構造的に遠い。たとえば、英語は前置詞であるが、日

本語は後置詞であるから、「で—教室」対「教室—で」である。同様に、動詞句の中心である動詞も目的語に対して前置と後置であるから、「読む—本を」対「本を—読む」である。どんな言葉をどのように並べるかを十分に定着させない限り、英語での知的な喜びは生まれず、英語は楽しくならない。また、文の作り方と単語学習の関係も大切である。先に述べた「読む—本を」対「本を—読む」は、実は正確でない。日本語は「(本+を)+読む」であるが、英語は「〜を読む+本」である。また、「(学校+へ)+行く」は、「行く+(へ+学校)」である。文を作る力は、単語の力と非常に関係が深い。こうした文を確実に使えるようになるための支援が重要である。

### 3. コミュニケーション能力と文法力

これまで「文法・文型・構文・文構造」という言葉を使わず、「文の作り方」としてきたが、その理由は、2つの誤解を避けるためである。1つは「コミュニケーション能力の育成だから、文法は教えてはいけない」という誤解であり、もう1つは「文法は、文法用語で教えるものである」という誤解である。先も述べたが、母語では心配ない文の作り方も、英語では1から始まる。そして、文法用語は正しい文の作り方がわかるようになるための効率的な媒体であって、文法力(文を作る力)自身ではない。

また、外国語の生産力作りを阻害する比較的陥りやすい誤りは、「コミュニケーションは聞くこと・話すことだけである」という概念と「コミュニケーションだからとにかく言わせよう」という考え方である。文字がある言語でのコミュニケーションや情報収集は、話し言葉と書き言葉の双方で行われるから、「聞く力・話す力」と「読む力・書く力」は全て必要であるし、これらは互いに支え合って伸びていく。また、英語は母語である日本語と文の作り方も単語も発音も文字も全く違う。こうしたものの1つひとつに上手に出会わせ、仲よくなるための作業を丁寧にしないまま即座に産出を要求することは、「お金や貯金がないのに買い物させようとする」と同じであり、生徒の自信を削ぎ、知的な喜びや好奇心にはつながりえない。

## 中1 先生力アップで英語好きを作る!

北海道室蘭市立陣屋小学校教頭 猪股 俊哉



新鮮な気持ちで中学校に入学してきた生徒。新しいことを知りたいという気持ちは大きく、英語に対する期待はとても大きいものです。夏休みまでの3か月間、「英語が楽しい」「英語の時間がうれしい」という「英語大好き」生徒をたくさん作る絶好のチャンスです。生徒の気持ちをぐっとつかみ、楽しい英語の授業をする要素は以下の4つ!

- 筋の通った学級経営
- ★授業に対する心構え
- ▲基本を大事にした指導
- 楽しい学習環境

### 1. はじめに

授業が楽しいというのは、バラエティー番組を見て楽しいのとは違います。知的好奇心をくすぐり、知らなかったことがわかったりする知識欲を喚起し、「できた」という達成感を持たせることです。それが学習の楽しさです。また、生徒とバランスの取れた人間関係も必要です。先生の年齢が若いと、生徒と友だち感覚になってしまいがちです。元気な中学生にとって、単に「お兄(姉)さん」になってしまっただけでは、指導はうまくいきません。中学1年生のこの時期は、指導する者と学習する者、先生と生徒というスタンスをきちんと教えることも、授業を成立させる大事な要素です。

私には苦い経験があります。もう20年も前のことになりましたが、教科書の指導はそこそこに、生徒が喜ぶワードゲームをなんとなくやっていたことがありました。授業には計画性がなく、まさに行き当たりばったりの最悪の授業でした。自分では、生徒がおもしろがって授業についてくるので、生徒との関係もよく、英語を楽しんでいると思いきや、実はそれはとんでもないことでした。最初はおもしろがっていた生徒も、次第にゲームに飽き、興味も薄れてきました。ゲームそのものも漫然となりました。ゲームに参加しない生徒も増え、教室はざわざわと始まりました。教科書を使った学習に戻ろうとしても、生徒の意

欲は高まらず、集中力はなく、私語は増えていきました。こうして授業は全く成立しなくなってしまいました。

そこで、授業を充実させ、楽しく教科経営をするための「授業に対する心構え」をお話しします。

### 2. 生徒をキャッチする目

教室に入ったとき、教室内の生徒の動きに気を配ることで、平和な状況で仲よく休み時間を過ごしているか、トラブルったりケンカしたりしていないか、気になる生徒はどのようにしているか、学習道具を準備しているかを瞬時に把握することです。教室の後ろのドアから入っていくと、生徒たちの自然な様子が見えます。教壇に行くまでに時間がかかるので、教室や生徒の様子をつかむことができます。

教壇に学習用具をそろえながら、生徒と会話することも大事です。前の時間の内容について話したり、部活や学校行事について話したりと、学校での話題は豊富にあります。会話をするときには、必ず生徒の目を見て話しかけることが大事です。なんとなく上の空で返事をしたり、目をそらしてしまっただけでは、生徒の心がキャッチできません。もちろん先生の気持ちも伝わりません。生徒の目を見て、自分の言葉(ハート)で話すことが大事です。生徒も、いつも先生の目がある、先生に見守られていると安心します。

### 3. 始鈴着席=授業開始

休み時間は職員室でお茶を飲む時間ではありません。次が空き時間ならよいでしょうが、次に授業を控えているときは、水分補給は迅速にすること。ましてチャイムが鳴ってからお茶を飲んでいるのはもったいないことです。始鈴は授業の始まりを知らせる大事な合図です。先生が職員室を出る合図ではなく、教室で授業が始まる合図なのです。始鈴と同時に先生は教室にいます。簡単なのですが、なかなか大変です。50分間の授業時

間がきちんと保障され、先生にも生徒にもしっかりと習慣づけられること。生徒指導や突発的な会議で時間通り教室に行けないときの「自習して待っていないさい」という指示は、いつも時間通りに先生がいるからこそできるのです。

### 4. 挨拶が基本

挨拶は大事です。授業の始まりと終わりの挨拶は、授業へのけじめをつけ、緊張感を高めることになります。私の場合は、起立せず、座ったままで英語で挨拶をしますが、姿勢を正し、先生の顔を見て挨拶するように、何度もしつこく指導します。当たり前のように、生徒は先生に、先生は生徒に「よろしくお願いします」「ありがとうございます」という気持ちをこめて挨拶することが大切です。

### 5. 学習内容の説明責任

きまぐれなあてのない旅というのがあります。しかし、どこへ行くにも、事前に時間的な目処、行き先、ルートなど計画を立てるものです。途中でもあとどれくらいで到着するのかなどといった情報も大切です。学習も同じです。先生は事前に学習の計画を立てているものですが、生徒の方はどうでしょうか。行き先もわからず、何をしているのかもわからず、連れまわされているような授業をしていないでしょうか。

パターン・プラクティスでただオウム返しにくり返してしまうような時間は無駄です。内容もわからずなんとなく音読しては、学習も効果が出ません。生徒にもその日の授業内容や学習の目的地(到達目標)を伝えるべきです。私は、授業の始まりや新教材の導入時に、大まかに伝えています。「今日は、物がいくつかあることを表す学習です」「今日は、この物が複数あることを示すsをつけて言えればOKです」などと示しています。指導案のように事細かに伝える必要はなく、「今日はこれが大事」と示すだけでよいのです。生徒が自分なりの到達目標を立てることができ、生徒の学習意欲を高めることになります。先生の方も、脱線して無駄に時間を使うことが少なくなるはずで、また、ほめたり、励ましたりするタイミングをつかむことができます。

### 6. 生徒のプレゼンを演出

文法の説明と教科書本文の内容説明などの講義中心の授業をしていませんか。オールイングリッシュで授業をしようと言って、先生の英語ばかりが教室中に響いている授業をしていませんか。そんな授業は、生徒にとっては受け身で、「わかったあ」とか「できたあ」という達成感のない、つまらない授業になります。

授業の主役は生徒です。生徒が英語に触れ、英語を発話し、英語でコミュニケーションするのが英語の授業です。先生は、生徒が少しずつ自信を持って英語を発話できるように、ダイナミック、ドラマチックに演出するプロデューサーです。表にはあまり出ず、生徒が主役になって、堂々とプレゼンできる環境と雰囲気を作ることです。

ここで私の失敗談です。教科書のダイアログをペアで前に出して発表させようとしたことがあります。10分ほど練習して、順番にペアごとに発表するというものでしたが、生徒はやりたがらず、前に出ても声が小さく、結果は惨たんたるものでした。先生が横から一生懸命励ますだけで、生徒にとっては何の達成感もない授業でした。失敗の要因はいくつかありました。学習到達目標をはっきりと示していなかったこと。モデルを十分に提示しなかったこと。中途半端な練習時間で、いきなりクラス全員の前で発表させたこと。練習のパターンも、ペアだけの練習という変化のないものであったこと。先生からのアドバイスやフォローが十分でなかったことなどが考えられます。

### 7. おわりに

英語好きの生徒を育てるためには、先生と生徒の信頼関係が大事です。根っことは、先生の先生力、人間力でしょ。先生が生徒と真正面から向かい合い、心を伝えるような教科指導が大事です。さらに、生徒を包むおおらかさと、生徒を安心させる笑顔を絶やさないと。それだけで先生と生徒の距離はぐんと近くなります。先生は生徒の夢です。いつも生徒を見守り、感動を与える存在でありたいものです。

## 中2 選択教科で作る英字新聞

神奈川県横浜市立奈良中学校主幹教諭 岩下 一久



### 1. 行事は自己を表現する絶好の素材

本校では、学年の主要行事(宿泊行事・体験学習)は6月に行われます。したがって5~7月と言えば、それらの行事の事前学習および事後学習の時期にあたります。

行事が終わった後、授業の中で、あるいは宿題として、その思い出などを英文にまとめるという課題はよくある取り組みですが、いずれにしても時間がかかり、十分な指導ができないままやりっぱなしで終わってしまうことがあります。

しかし、行事というのは、生徒にとって学校生活の中で教科学習以上に魅力的な活動であり、自分の思いを書きつづるには絶好の素材となります。

私は、現在2年生の必修教科に加え、選択教科を週に1時間担当しています。選択教科では「英字新聞作り」というコースを開設しました。内容は、前半(4~9月)が「職業体験」の事前・事後学習のまとめ、後半(10~3月)は生徒個々の「自由課題」としました。選択教科の時間に取り組みますので、英作文指導だけでなく、紙面作りに至るまで、きめの細かい指導が可能になります。また、総合的な学習の時間と教科学習の関連を図った学習活動が展開できます。

生徒は、教科学習以上に行事に対しては意欲的に取り組むものです。その生徒たちの行事に対する思いやエネルギーを教科の学習に生かすというのは、生徒にやる気を出させる上でも、なかなかよいアイデアです。

### 2. 英字新聞作り

では、その英字新聞作りの計画から制作手順等について実際の取り組みの様子を紹介します。

#### (1) 活動計画と制作手順

完成までにかかる時間は大体15時間程度。発表と相互評価の時間を加えると、合計17時間程度で計画を立てることができます。作業の進行には、

当然個人差がありますので、それぞれの作業にかかる時間は、1時間程度の余裕を考慮してあげる必要があります。制作手順とそれぞれの作業にかける時間数は、おおむね以下の通りです。

- ①テーマおよび記事の内容設定(2時間)
- ②記事の見出し検討(1~2時間)
- ③紙面のレイアウト(1時間)
- ④記事の原稿作り(3時間)
- ⑤原稿の英訳(3~4時間)
- ⑥紙面への書き込み(4~5時間)
- ⑦発表とまとめ(2時間)

#### (2) 内容構成から英訳まで

記事の内容構成は、紙面の大きさ(B4判)を前提に考えると5つぐらいが妥当です。

- テーマ:「ラーメン」  
(職業体験先:ラーメン屋〇〇〇)
- A 大記事:職業体験の記録  
見出し:「とんこつラーメンについて」
- B 中記事:事前学習①  
見出し:「私の好きなラーメンショップ」
- C 小記事:事前学習②  
見出し:「麺の管理方法」
- D 小記事:事前学習③  
見出し:「細麺派、それとも太麺派?」
- E 小記事:職業体験の感想  
見出し:「とんこつは最高!」

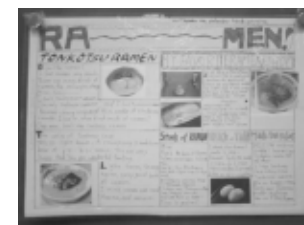
上の例は、ラーメン屋さんで職業体験を行った男子生徒の考えた内容構成です。

以上の構成を最初の3時間程度でまとめた後、写真や図の位置などをイメージしながら、紙面のレイアウトを考えます。原稿作りは、このあたりから取りかかります。ただし、「Aの大記事」と「Eの小記事」は、実際に職業体験を終えてから原稿を書きます。

そして、いよいよ一番時間のかかる作業に入ります。英語への翻訳です。だいたい4~5時間の活動です。生徒には「時間がかかるけれど、根気よくがんばろう」と毎時間励ましてあげなければなりません。

しかし、生徒たちの取り組みは、実に真剣そのものです。多くの生徒は、意欲的に辞書を使います。自分の思いを表現することに対して一生懸命なのでしょう。ですから、この英訳の活動はできるだけALTとのTTで行い、生徒がうまく表現できないことや辞書ではわからないことは、直接ALTにアドバイスをしてもらいます。

#### (3) 紙面に現れる学習の積み重ね



先の男子生徒の作品には、新聞タイトルの飾り文字のように紙面デザインだけでなく、英文の表現の中にも様々な工夫がうかがえます。

たとえば、Dの小記事「細麺派、それとも太麺派?」には、「THICK OR THIN?」という見出しが付けられています。実に英語らしいキャプションです。

また、Aの大記事の職業体験の記録では、店主とのインタビューを記事に織り交ぜ、そのお店の看板メニューを写真入りで掲載しています。

最後のEの職業体験の感想のコーナーでは、「The reason why...」や「I think that...」などのフレーズを用いて、自分がとんこつラーメンを好む理由や主張をきちんと述べています。

このように、紙面への書き込みが始まると、俄然生徒たちは、やる気を起こします。時間の経過とともに紙面が着実に完成に向かうからです。自分の努力とこれまでの学習の積み重ねが形となって現れてくる、これは生徒たちの学習意欲を掻き立てる上でとても重要なことです。

#### (4) 発表とまとめ

この英字新聞作りのまとめの活動は、「1分間スピーチ」と「品評」です。自分が事前学習で知れたことや職業体験で学んだことを、みんなの前

でスピーチします。

スピーチの内容そのものを考えることは、難しいことではありません。既にたくさんの情報を新聞記事にしているからです。むしろ難しいのは、大切なことを時間内でわかりやすく伝えられるよう、話す内容を絞り込むことです。短い簡単なスピーチですが、自作の英字新聞を使ったSHOW & TELL形式のスピーチは、興味深いものがあります。

最後に、お互いの作品について品評をします。品評の際のコメントは、各自が気付いた作品のよい点だけを述べ合います。先生や友だちからほめてもらうことは、生徒たちにとって「みんなに認めてもらった」という自信へとつながります。

### 3. 課題解決学習の方法を身に付ける

十分な時間と手ほどきがあれば、生徒はそれぞれの創意工夫(オリジナリティー)を生かし、ある程度の作品を完成させることができます。また、1つの教室の中でお互いのアイデアを共有しながら、じっくり丁寧に学習を進めます。

この英字新聞作りは、単なるライティング活動にとどまりません。辞書を調べたり、内容の構成を考えたり、表現を工夫したり、確かに「書く力」を養うための基本的な学習が求められます。

しかし、この活動で培う最も大切な力は、下に示す、いわゆる課題解決学習(Project Study)の基本的な方法を身に付けることです。

- ①課題・テーマ設定
- ②事前調査  
(資料・文献・インターネット等の活用)
- ③独自調査(体験、現地調査、インタビュー)
- ④調査結果と考察のまとめ
- ⑤発表・報告

「新聞作り」という自己表現手段と「職業体験」という問題解決の材料を融合させることによって、この時期の生徒の知的好奇心に働きかけ、学習意欲を揺さぶることができるのではないかと考えます。

## 中3 生徒の「なぜ？」にこたえる

徳島県三好市立東祖谷中学校教諭 武知 一誠



### 1. はじめに

生徒が安心してがんばれる授業を作るためには、「なぜ英語を学習するのか?」「なぜこの学習方法が行われるのか?」という意味付けを確実に行った上で、生徒が「よくわかる体験」と「認めてもらえた」と実感できる時間を保障することが大事である。

本稿では、生徒のやる気を引き出すために、私が実践している工夫を紹介したい。

### 2. なぜ英語を学習するのか?

学級開きのとき、「なぜ学校に来るのか?」「ここでともに学ぶことで、何を将来の自分に繋げていくのか?」ということについて考えさせる先生方は多い。

それと同じで、「なぜ英語を学習するのか?」、その目的を生徒1人ひとりにじっくり考えさせる。「試験のため」という意見はもちろんあるが、「カッコいいから」「いろんな国の友だちがほしいから」「英語ができるようになりたいから」など英語学習に対する生徒の考えは多様である。出された意見を学級で共有すると、「英語を勉強することは自分にとって必要なのだ」という意識が芽生え、生徒の学習姿勢はずいぶん違ってくる。

### 3. なぜこの学習方法なのか?

生徒を取り巻く状況は、時期に応じて様々である。たとえばこの時期、運動部に所属している中学3年生は総体を間近に控えていることもあり、精神的・体力的に授業に対する集中力が疎かになりがちである。生徒の状況をよく把握し、その都度、一番効果的な学習方法を用いて授業を行う必要があるが、私は以前、生徒から「指導方法がコロコロ変わってめっちゃ困る」という授業感想を書かれてしまった。それ以来、私は授業において一定の方向性を保ち、学習方法の意図を生徒に十

分説明し、納得してもらった上で授業を進めるようにしている。

### 4. よくわかる体験

「よくわかる体験」が増えると、生徒は楽しくなり、やる気が高まる。生徒たちの心地よい「よくわかる」を充実させるために、授業は本多敏幸先生(東京都千代田区立九段中等教育学校)を参考にしたスタイル(下図参照)を基本とし、中嶋洋一先生(関西外国語大学准教授)が述べる授業と授業をつなぐ「のりしろ」を意識して進めている。また、学習事項の反復を授業に取り入れている。反復学習は定着度を高めるためにとても大切である。意図的に既習の内容に触れさせることで、生徒はよく理解できたという達成感を持った自分に出会い、うれしくなっているようだ。気分のよい状態で、新出事項の学習を迎えるので、吸収も早い。

序盤	単トレ・PHONICSなどの帯学習
中盤	前時の復習
終盤	新出事項

#### (1) 単トレ

授業の序盤で「単トレ」と名づけた単語練習を行っているが、ここでは既習単元のリストを活用している。「単トレ」活動では、主に音読練習を行う。生徒をペアにして、単語の読み方や意味を覚えられているかお互いに確認させる。ここでは、生徒に自分でレベル(1音読 2英語→日本語 3日本語→英語)を決定させる工夫をしている。

また、2課に1回の割合で教科書本文の音読テストを実施しているが、単語が読めなければ音読テストも当然うまくいかない。なお、音読テスト当日、同じ範囲の単語確認テストも同時に開催することになっている。日頃の「単トレ」が音読テスト・単語確認テストの準備にもなるので、生徒は意欲的に「単トレ」に取り組んでくれている。

### (2) PHONICS指導

中学3年生であっても基本的なPHONICSを授業で取り上げている。単語のつづりの法則を知ることが、英語が苦手な生徒にとっても基礎を学び直すチャンスとなる。ALTとExplicit Phonicsの方法で学習する時間を5~10分くらい設けている。Silent "E" (Magic "E")などの説明をすると、既に単語を覚えていた生徒たちも「そんなルールがあったのか」と驚き、その後のPHONICS学習を楽しみに待ってくれる。

### 5. 「認めてもらえた」と実感させるために

#### (1) 授業における雰囲気作り

授業において「間違えることは決して恥ずかしいことではない」「できる人が偉いのではなく、考える人・助け合う人が偉い」「みんなでがんばろう」という雰囲気作りを大切にしている。これは私が、ペア学習・グループ学習を重視している理由ともなっている。「依存と依存」の関係に陥らないように注意し、互いの自律を願い、互いに学び合いながら人間関係を豊かにできる時間にするよう生徒にもくり返し呼びかけている。

#### (2) 音読練習における工夫

単元の中盤で行っている本文音読練習は、樫葉みつ子先生(徳島県徳島市立富田中学校)を参考に生活班を活用している。まずは、自分の「隣の人」とペアになり、次に「前後の人」と、その次は「斜めの人」というようにペアの相手を変えながら練習させる。こうすると、大きな席移動もなく、数多くのペア練習ができる。

ペア練習の際、教え合っている場面などを見つけると、その都度取り上げ、全体に紹介し、ほめている。そのようなことをくり返し、みんなで小さなステップをともに駆け上がっていき、居心地のよい場所を作っていくたい。

練習の仕上げは、グループ(4人)内で発表会を行う。その際、必ず互いをほめ合う時間を確保する。よいところを見つけ合う時間とするのだ。改善すべき点の指摘は、ほめ合って温かい人間関係になってからのほうが、言いやすいし、聞きやすいようだ。

### (3) 家庭学習の支援

家庭学習を定着させるために、課題の回収方法と回収後の指導を工夫している。毎朝、自学係に回収してもらい、未提出者には声かけもしてもらう。そしてそんな自学係の仕事ぶりを、授業中に全体の前でほめちぎる。「集めてくれてありがとう」「仲間を励ましてくれてありがとう」の気持ちを伝えるのだ。同時に、毎日提出している生徒たちの努力も認める。双方ともに心地よいようだ。なお、回収後の指導における工夫だが、努力が見られるノートは教室に掲示する。そのノートを参考に、自分なりの自学方法を探してほしいとの願いだ。逆に、気にかかるノートを見かけたときには、その生徒を呼び出し、「なぜそういうふう勉強したのか」とノートと一緒に見ながら、その子の考えを聞く。そのとき、「ずるい気持ち」(字数を埋めたかったからなど)があった場合は、それをきっかけに指導ができる。やらされる勉強ではなく、自分のために学ぶ力を育てたい。

また、教科書準拠ワークは、バランスもよく復習用として適しているのでは是非活用させたい。毎日の家庭学習の成果として提出してもよいというルールにしたところ、テスト後だけに回収するよりも、生徒の活用度は上がった。

### 6. おわりに

やる気をもつためには、教師が全体的な見通しをもって授業をすること、それぞれの活動の意図を説明できること、そして生徒が納得できることがとても重要だと思う。

生徒にやる気を出させるために、まず「私」の英語教育の目的や英語授業の見通しを明確にし、研究会や書籍、生徒との交流で心を耕し、誰もが安心して関わり合える時間を生み出せる授業者になりたい。

#### 参考文献

『第56回全英連 東京大会資料』  
『徳島県中教研英語部会研究委員会資料』  
中嶋洋一他(2004)『6-way Streetライブ版(DVD)』バンブルビー



## スラッシュ・リーディングの効果

群馬県榛東村立榛東中学校教諭 浅井 清隆



### 1. はじめに

最近、通訳者の訓練方法が、英語教育の中に取り入れられるようになってきています。スラッシュ・リーディングはその代表的なものです。スラッシュ・リーディングとは英語を意味のまとまりごとに頭から理解していく方法です。私は自分の英語力向上のために毎日この訓練をするようにしています。それは英文をより速く理解するのに役立つことが実感できたからです。そして教師として授業をする中で、スラッシュ・リーディングは中学生の英語力向上にも効果があるのではないかなと思うようになりました。これからその理由を述べてみたいと思います。

### 2. リーディングにおいて

「英文を頭から理解する」という言い方をよくしますが、この言い方は少し言葉足らずです。「英文を意味のまとまりごとに頭から理解する」の方が正しいと思います。英語を日本語らしく訳しながら理解しようとすると、どうしても英文の流れに逆らってしまいます。そのため読むスピードが遅くなります。これを解消するために「英文を頭から理解する」ということになるわけです。

まとまった量の英文を読む際には、意味のまとまりごとに理解していくスラッシュ・リーディングは特に有効です。幸い日本語は語順に柔軟な言語ですので、実際に英文をスラッシュごとで日本語に訳してみても十分理解できます。そこで最近では、教科書本文の内容理解の一環として、あらかじめスラッシュで区切った英文を日本語に訳させるスラッシュ・リーディング訳を宿題にして生徒に取り組みさせています。毎時間少しずつ区切り方、訳し方を指導していけば中学生にもできるようになります。ただし、身に付けるには時間と根気が要るので、どんな効果があるのかをしっかりと説明し納得させた上で、取り組みを始めることが大切です。

### 3. リスニングにおいて

英文を「読むこと」を通して意味のまとまりごとに理解するのがスラッシュ・リーディングなら、「聞くこと」を通して同様に理解するのが「スラッシュ・リスニング」です。英語を話すとき、話す人は意味のまとまりで区切りを入れます。したがって、その区切り、つまりスラッシュごとに理解しながら聞いていくというように、スラッシュ・リーディングで身に付けた能力を応用すれば、リスニングにも強くなれるのです。

### 4. スピーキングにおいて

キング牧師やJ. F. ケネディの演説を聴いていると、ときどき間を入れているのがわかります。意味のまとまる場所に間を入れることで、彼らはスピーチをわかりやすく、よりインパクトのあるものにしています。つまり相手にわかりやすく話すためには「間」が必要なのです。これは何もスピーチに限ったことではありません。日常会話でも同じです。意味のまとまりに気を付けて話すことは、相手に理解してもらえらる話し方の基本です。

### 5. ライティングにおいて

日本語の語順のまま英文を書いてしまう間違いが中学生にはよく見られます。スラッシュ訳を続けていくと、日本語と英語の語順の違いにも気付くようになります。慣れてくれば、英文にしたい日本語の意味のまとまりごとに英語の順に並べ替えられるようになります。たとえば、「イチローと松井は昨日東京ドームで野球をした」を〈イチローと松井は〉、〈野球をした〉、〈東京ドームで〉、〈昨日〉というようにです。この順に英語にしていけば正しい英文が書けるわけです。

### 6. おわりに

スラッシュ・リーディングの効果について述べてきましたが、大切なのはまず教師自身が自分で試してみることです。その効果を実感できてこそ、自信を持って生徒に教えられるのです。



## 私の授業実践報告

～Outputを目指すための語彙と基本文を組み合わせたInputの工夫～

前 大分県大分市立判田中学校教諭 甲斐 しのぶ



### 1. はじめに

英語でコミュニケーション活動を行うためには、活動で使える語彙や基本文をしっかりとinputしておく必要があります。しかしながら、週3時間の授業では限界があり、効率的に学習させるための工夫が必要です。そこで、本年度は中学1年生を対象に、活動で使える語彙を取り入れた基本文を丸覚えさせるという取り組みを進めてきました。

### 2. 具体的実践

授業の始めの5分間、20の英文を練習しています。主に次の練習方法を組み合わせています。①教師が言った英文を生徒はリピートする。②教師は日本語を言い、生徒はそれを英文にして言う。③教師は肯定文を言い、生徒はそれを否定文にして言う。④教師は肯定文を言い、生徒はそれを疑問文にして言う(③・④の方法については大分大学の柳井智彦教授の実践を参考にさせていただいています)。リズム感を育てるためにメトロノームを使って練習をさせており、英語の苦手な生徒も楽しんでいます。扱った項目は下(表1)にまとめています。

表1 1年間で扱った項目

学期	項目
1学期	Classroom English・形容詞・be動詞の文・一般動詞の現在形
2学期	名詞の複数形・命令文・主語が3人称単数現在の文・過去形の文
3学期	代名詞の文・canの文・現在進行形の文

この1年間で約400の英文をinputしてきました。その結果、主語の後に動詞がくること、動詞がど

表2 canを使った肯定文・否定文・疑問文

	Japanese	English	Negative Sentences	Questions	動詞	意味
1	私にはそれがみえます。	I can see it.	I can't see it.	Can you see it?	see	みる
2	私はそれができます。	I can do it.	I can't do it.	Can you do it?	do	する
3	私はそれを見つけることができます。	I can find it.	I can't find it.	Can you find it?	find	みつける
4	私はそれを作ることができます。	I can make it.	I can't make it.	Can you make it?	make	作る
5	私にはそれが分かります。	I can understand it.	I can't understand it.	Can you understand it?	understand	理解する

の名詞と結び付くのかなどが自然と身に付いてきているようです。

英文は生徒がコミュニケーション活動でよく使う日常生活に即したものを使うべきだと考えています。そこで教科書に載っている英文、他社の教科書で使われている英文、辞書の英文、コーパスをアレンジしました(表2参照)。

また、英文は生徒が興味を持つ内容を取り上げることが大切です。3単現の練習では自分たちが習っている他教科の先生方のことを説明する文を練習しました。

[例文] Mr. Kondo teaches social studies. He studies history. He likes hamburgers.

2学期に「自分の身近な人について紹介をしてみよう」という課題を与えたとき、生徒はそれぞれ学んだ英文を使って表現をしていました。

[生徒の作品] I have a sister. Her name is Suzue. I play soccer. But she doesn't play soccer. She plays volleyball every Wednesday. She knows two volleyball players ...

間違えた英文をoutputしたときにも、自分の体にしみこんだ英語の感覚が、何かおかしいと気付く力がついてきているようです。

### 3. おわりに

以前は生徒の中に語彙や基本文のinputができていないにもかかわらず、無理やりoutputさせようとしていました。この実践を通して、中学校で学習する語彙や基本文を自分の中に十分に取入れることが、outputできるようになるための必要条件だということが実感できました。

## Rule-based approach vs. Exemplar-based approach (後編)

奈良教育大学准教授(投稿時：北海道 市立函館高等学校教諭) 佐藤 臨太郎



### Exemplar-based approach

In my previous essay, I briefly explained the rule-based approach and its advantage and disadvantage, adding the need for the exemplar-based approach. The following is a procedural example of the exemplar-based approach.

1. The teacher gives students a small talk with a lot of sentences including the target grammatical structure. If he/she thinks students have not understood the talk well, he/she adds the outline in Japanese or English of modified or simplified version, and then gives the original talk again.
2. The teacher gives a paper in which several example sentences with the target grammatical structure and Japanese translations of each sentence are written. After understanding the meaning of each sentence, students memorize the sentences without being given an explicit grammatical explanation.
3. Students read a passage that had been seeded with the target grammatical structure. The teacher gives a brief explanation of the passage in English or in Japanese.
4. Students listen to a different passage that had been seeded with the target grammatical structure. The teacher gives a brief explanation of the passage in English or in Japanese.
5. Students are asked to memorize several example sentences again, and then take a small written test.

This exemplar-based approach is followed by the traditional rule-based approach. However, after the exemplar-based teaching, the rule-based explicit teaching can be much shorter and briefer than the traditional one. Of course, students should be given more exemplars verbally from their teacher even after the rule-based explanation. As some may assume, using all of the activities mentioned above is impractical. We could employ some of the activities in our class, and the activities do not always have to be provided in a systematic manner. As for the order of the two approaches, the rule-based approach, which is simpler and briefer than the traditional one, can be conducted first, followed by the exemplar-based approach.<sup>1</sup> The teacher can provide exemplars anytime in the class spontaneously, adjusting the degree of difficulty of their English to various levels according to their students' understanding flexibly.

It can be argued that employing the exemplar-based teaching is time-consuming and inefficient, but the approach is effective in the long run: students are exposed to much more input, which is crucial for language acquisition; as they are supposed to think and guess the rule of the grammatical structure (or collocations and lexical phrases) by themselves without being given explicit explanation, they can establish the attitude to do so if and when they encounter unknown grammar, words and expressions while processing input; students are more likely to improve their implicit knowledge, which is

prioritized over explicit knowledge by SLA research (N. Ellis, 2005).<sup>2</sup> Needless to say, as I mentioned in the previous essay, considerable amount of extensive reading and reading-aloud activities are crucial and that we may want to conduct our English classes mainly in English to give students more input.

### Conclusion

We should employ both the exemplar-based approach and the rule-based one keeping a good balance between the two, complementing one another. The former can contribute the development of fluency and the latter accuracy. In Japanese English education, fluency has long been made light of and accuracy has been regarded as more important than fluency. However, as the importance of developing students' communicative skills has been emphasized by this globalized society in which we have to learn and use English for the purpose of communication, both of the aspects should be achieved. The use of the two approaches seems greatly recommended now. One of the main reasons why the rule-based teaching has been highly favored is that it is much easier for teachers to conduct. Teachers do not have to produce so much English by themselves, while in the exemplar-based one, teachers themselves should be a good resource of English by producing a great amount of English verbally and spontaneously, sometimes with actual communication with students in English. Unfortunately, it can be true (and shameful) that teaching methods which are easier, efficient (not effective) and comfortable for teachers without requiring high English proficiency have been greatly preferred in Japan. English class dominated only by direct translation from English to Japanese is one example.<sup>3</sup>

To conduct a genuinely effective English class, we teachers have to strive hard to improve our English so that we are proficient enough to employ every teaching approach such as the exemplar-based one. Our serious exertions in learning and acquiring English must precede everything.

### Note

1. Technically speaking, it is not the exemplar-based approach if exemplars are provided after an explicit explanation of the target grammar. However, an important point is that a great amount of exemplars should be provided by the teacher for learning to occur.
2. Implicit knowledge is knowledge with intuitive awareness of linguistic norms and is available for automatic use in spontaneous production, while explicit knowledge is knowledge with conscious awareness of linguistic norms and requires controlled processing.
3. Elaborating on the direct translation method is beyond the scope of this essay.

### References

Ellis, N. (2005). At the interface: Dynamic interactions of explicit and implicit knowledge. *Studies in Second Language Acquisition*, 27, 305-352.



# 公立中学校での授業内容について

— 卒業後の意見より —

静岡県沼津工業高等専門学校准教授 塩谷 三徳

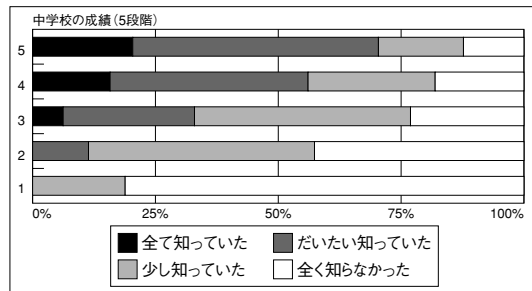
中学校教諭を2年間経験した後、13年間の高等学校教諭を経て、現在も高等専門学校という職場で中学校を卒業したばかりの学習者に向き合っていますので、十数年前と比較して中学卒業時の英語運用能力が高い者が増えていることを実感しています。しかしその一方で、英語の理解度が低い学習者の場合、今日重視されているはずのコミュニケーション能力自体も以前の学習者に比べて身に付いていないと感じることがあります。結果として、中学卒業時点での英語の学力差は以前より広がっているのではないのでしょうか。

英語を苦手としている生徒や学生に中学校時代の授業の様子を聞くと、「教科書の大意を理解させるだけで、コミュニケーション能力育成のための活動ばかりを重視している」という旨の回答が多く、ここに原因の1つがあるように感じます。彼らによると、コミュニケーション活動を重視する中学校の英語の授業では、教科書の内容を事前にある程度押さえて、後は授業中のコミュニケーション活動に積極的に参加しさえすればよい評価を得られるようです。

英語を専門として学ぶ意欲がある者や、受験のために英語が必要であると感じている者は、塾や家庭教師など学校以外の手段で、教科書の大意のみならず、文法の説明や演習を受けている場合が多く、学校での授業を大して必要としていません。中学卒業後、英語を苦手としている者は中学校の授業について「最初からわかっている生徒を中心に授業を進めるだけで、本当に必要としているわからない俺たちに教えてくれなかった」、また、中学校時代に英語ができると評価されていた生徒も「中学の授業は、事前知っていることを言うだけで、後は適当に英語を(教師やCDの)まねをしてしゃべってればよかったから、英語の勉強の仕方がわからない」と言います。

そこで、教科書の内容を事前知っていること

と中学校時代の成績との関係を調査するため、平成18年6月上旬、静岡県内のA大学(私立)とB大学(国立)の公立中学校出身の1年生(A大学95名、B大学237名)を対象にアンケートを実施しました。大学生を対象にしたのは、①「回答が、現在の大学での英語の評価に関係することは全く考えられず、現役の中学生よりも回答に客観性および率直性がある」、②「特定の中学校を対象にしないことで、学校や地区、教員による偏りを防ぎ、妥当性を高めることができる」と考えたからです。



結果は、上の表のように、成績上位者ほど教科書の内容を事前知っていた割合が高いことがわかりました。断言はできませんが、何らかの方法で事前に教科書の内容を知っていないと、授業だけでは教科書の内容が理解できないで終わり、それが学力の低下につながっている可能性があります。また、授業内容についての質問に対して「授業中に文法をもっと取り扱うべきである」という回答が全体の44%を占め、教科書本文の和訳が必要であったか?という質問に対し、83%の学生が「必要であった」と回答していることも付け加えておきます。また、実際の中学校の授業には、今回の調査対象ではない「大学に進学しない」生徒も含まれます。

コミュニケーション重視の授業を批判しているわけではなく、「英語を学ぶ目的・意欲が多様である公立中学校では、そればかりでは弊害もある」実態があることをご理解いただきたいと思います。



# 『語源で覚える英単語飛躍増殖辞典[増補版]』

島岡 丘 著

話題の書。既に『英語教育 2008年1月号』(大修館書店)の「New Books」のコーナーでも取り上げられ、高山芳樹氏(東京学芸大学准教授)がコメントしている。初版は1993年。このたびは好評を背景に14年ぶりの改訂となる。

構成(本体)は以下の通り。

1. 効果的な単語の覚え方
  2. 語源で増やす英単語
  3. セットで覚える英単語
  4. 語源で覚える慣用表現
  5. 意外な意味を持つ単語
  6. 連想で覚える英単語
  7. カタカナ語から単語を増やそう
- 英語索引

一見すると「単語集」の体裁をとるが、その対象は難関大学受験生から一般社会人、さらに英語研究者におよぶ。いい意味での「英語オタク」(評者もその1人)にはたまらない魅力に溢れている。たとえば、パキスタンのベナジル・ブット氏の暗殺事件を英字新聞で読んでみると、“a political dynasty”(政治家の家系)という表現に遭遇する。こういう場合、本書の英語索引を活用し、dynasty(p.252)にあたると、「2. 語源で増やす英単語」のところに、dynamic, dynamite, dynamo, dynamotorなど、ギリシャ語に由来する語とともにこの語の解説が加えられている。フムフム、dynは「力」「動力」の意味だな、つまり「力のある名家。名門」と納得するわけである。調子にのって、Googleで“abe, political, dynasty”と入力すると、安倍晋三前内閣総理大臣を説明するサイトに行き着き、一読。「よーし、覚えた!」と自己満足に浸る、といった次第である(笑)。

ここまでは、改訂前も味わたった醍醐味だが、「増補版」では、新たに47ページにおよぶ大部な「付録」が加わっている。その構成は以下の通り。

1. 日英語共通音のリスト
2. 不可欠な説明語・定義語
3. こんなにもたくさん使う英語からの「借入語」!

著者の島岡丘博士(筑波大学名誉教授、聖徳大学教授)は、『教室の英語音声学』(研究社出版)で有名な音声学者で、最近では『日本語からスーパーネイティブの英語へ—10段階完全マスターのコツと処方箋—』(創拓社出版)を上梓され、「近似カナ表記」による発音指導方法を体系的にまとめられている。付録にはこの分野の最新の研究成果を注入されている。たとえば、「1. 日英語共通音のリスト」での次の言葉を見て、どんな英語の音(単語)を連想するであろうか。

「魚万」, 「汚(きってねー)い椅子」, 「あ、いかん」, 「斎藤寝具」, 「家康」(p.465)

対応する、語を並べてみる。

woman, tennis, icon, sightseeing, yes(強く言うとき)

これを見て、ニヤリとできる人は音声学の素養のある人であろう。ここからヒントを得て、中学生にtennisと「テニス」の音の違いに気付かせたり、yesの練習の後に、earとyearの音の違いに発展させたりと、いろいろ活用できる。

この発想は、「3. こんなにもたくさん使う英語からの『借入語』!」でも大活躍で、約800語のカタカナ語を、英語の定義、カナ表記、精密発音記号の3通りに発展させている。例を掲げる。

curtain(=what is hung across a window)  
[カエ〜トンズ ká:t.n]  
hope(=desire for the future to be good)  
[ホウブ houp]  
market(=place for buying and selling)  
[マオーアケイト mɑ:rk.ɪt]  
wine(=alcoholic drink made from grapes)  
[ウアインズ wain]

コミュニケーションを重視するなら、文型・文法事項より語彙を重視せよ、は定説になってきている。しかし、本書のように語彙と音声を結びつけた書も珍しい。貴重な資料として活用したい。

(成蹊中学・高等学校教諭 四方 雅之)

【新書判・512頁 定価2,310円(本体2,200円)】

発行：創拓社出版

## 海外ホームステイと 現地地名を覚える重要性

私の大学でオーストラリアのホームステイ・プログラムを始めて13年が過ぎた。場所は東海岸のゴールドコーストである。そこの大学のきれいなキャンパスにある英語学校へ、ホームステイしながら3週間通うというプログラムである。数年前に学費の値上げがあり、ブリスベンにある大学に2年移したこともあったが、ここも学費を上げ同じ料金になったのと、住居の郊外政策をとるブリスベンはホームステイ先が皆学校から遠いこともあり、数年前からゴールドコーストに戻した。引率は私が行うようにしている。というのは学生より教員からのクレームが多いからである。確かに、初めての先生にとっては知り合いは学生だけであり、心細いのである。そんなことから、時間の潰し方、そこでの遊び方を心得ている私が引率するのである。

いろいろなことがあった。しかし、つくづく思うのは、学生がなかなか地名を覚えてくれないことである。自分のホームステイ先の住所を最後まで覚えてくれない学生が多い。そういえば、英語の授業では地名などの固有名詞を覚える重要性は強調されない。道を聞くときの表現、“Please tell me how to get to ~.”とか“Tell me the way to ~.”とかは一生懸命教える。しかし、実際に海外に行くと、「~」のところ、つまり地名が大事であり、正しく覚えないとそれこそ致命傷になる。タクシーに乗る場合、住所が書いてある紙をドライバーに見せれば済むと考えている学生も多い。しかし、それじゃあ何のために英語を勉強してきたのだろう。何のためにオーストラリアまで来たのだろうか。実は英語学習が生きるのはこの「~」の部分、つまりこの未知の部分なのだ。“Please tell me how to get to ~.”とか“Tell me the way to ~.”はどうでもよい。いや、むしろ、邪魔なときさえある。バスやタクシーなら、しっかりと英語の発音で「~!」と言えよのである。すると、バスならドライバーから“Single?”(片道

か)と聞かれるから、“Yes.”とか“No. Return.”(往復です)と答えればよいのである。

あるとき、公共バスを利用して海岸のきれいな岬の公園であるBurleigh Heads(バーレイ・ヘッズ)へ行ったとき、1人ずつ行き先を言って料金を払わせたのだが、前もって練習しておいたにもかかわらず、何人目かで「先生、どこだっけ」と大声で叫ばれてしまった。後で、ある学生に「覚えにくいですよ」と逆に文句を言われてしまった。確かに、彼らのホームステイ先でも難しい住所がある。たとえば、Cheltenham, Cottesloe Drive, Tullamarine Drives, Acanthusとか、バス停ではMudgeeraba, Gunsyndとか発音しにくい。しかし、ここに海外ホームステイの醍醐味があるのだ。ホームステイ先の両親に教わるとか、先生に聞くとか、現地の人に聞くとか、このとき、“How do you say this?”(sayでなくpronounceでないといけないと主張した可哀相な学生もいた)という邪魔な英語が生きてくるのだ。オーストラリアにはイギリスやアメリカで見かける地名にまじってアボリジニーの言葉が地名に残っていて、興味深いと私は思うのだが。たとえば、Bondi beachはダイアナ妃も訪れたことがあるSydneyの代表的な海岸だが、このBondi(ボンダイ)はアボリジニーの言葉で「波が砕ける音」から来たと言われている。そう言われてみると、波が岩に砕けるときボンダイと聞こえないこともない。

実際、英語の勉強とは、こういった固有名詞を正しく発音したり、教わったり、聞いたりするためにやっているんだくらいの気持ちが必要だと海外に行くたびに感じるのである。電子辞書にも載ってない。だから、個人の努力が要るところなのである。(浜松大学教授 三井 敏正)

### 投稿を歓迎します

英語教育に関する問題提起、実践報告、研究などの投稿をお待ちしております。締切は特にありませんが、本誌は今後、5月、9月、2009年1月、3月にそれぞれ発行の予定です。原稿到着の時点で掲載号を決めさせていただきます。規定は以下のとおりです。ご不明の点は編集部までお問い合わせください。

- ① 22字詰×72行以内(本文分量)
- ② 二重投稿はご遠慮ください。
- ③ 採用分には薄謝を呈いたします。